

# 『ラ・カリカチュール』



『フィガロの結婚』

## 獨協大学図書館

**展示期間：2012年11月12日（月）～12月21日（金）**

2012年度オープン・カレッジ「ラ・カリカチュール—近代漫画の成立—（獨協大学図書館の貴重書紹介講座）」に関連して、春学期の第一期『ラ・カリカチュール』に引き続き、秋学期は第二期の資料を2週間毎に入れ替え、3回にわたり展示します。

## ■ 『ラ・カリカチュール』について

『ラ・カリカチュール』*La Caricature* は、小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac (1799-1850) の発案のもと、画家・ジャーナリスト・出版者であるシャルル・フィリポン Charles Philipon (1800-1862) を発行責任者とし刊行された。この風刺週刊紙は、1号につき文章4ページとリトグラフ（石版画）原則2枚からなり、発行年代により第一期と第二期に分けられる。

第一期『ラ・カリカチュール』は1830年11月から1835年8月にかけて発行された。内容の多くがフランスの政治風刺であったため、フィリポンは「政治的『ラ・カリカチュール』」*La Caricature politique* と呼んだ。一方、1838年11月から1843年12月にかけて発行された第二期『ラ・カリカチュール』はフランス風俗風刺という内容から「非政治的『ラ・カリカチュール』」*La Caricature non politique* もしくは「臨時『ラ・カリカチュール』とその続き」*La Caricature provisoire et sa suite* と呼ぶことがある。

第一期『ラ・カリカチュール』の発行は1830年の七月革命により復古王政が打倒されてから間もなくのことであり、そのことは『ラ・カリカチュール』が「言論の自由」を体現していたことを意味する。しかし、市民王ルイ・フィリップ Louis Philippe (1773-1850) が保守に走るにつれ、『ラ・カリカチュール』の政治風刺も辛辣さを増し、政府はいつの間にか検閲を復活させ、『ラ・カリカチュール』に対して高額な保証金を要求、また訴訟の末にフィリポンを9ヶ月も拘禁し、巨額な罰金を科した。最終的に、1835年9月の検閲法（いわゆる九月法）が成立する直前に第一期『ラ・カリカチュール』は廃刊に追い込まれた。

九月法は、洋梨としてルイ・フィリップを描いた『ラ・カリカチュール』の権力者に対する個人攻撃をうけ、「出版物において意見を述べることは許すが、絵によって代弁させた意見が何らかの行為に変わることを禁止」したのである。しかし、フィリポンは『ラ・カリカチュール』の兄弟日刊紙『シャリバリ』*Le Charivari* において、時事問題という切り口で国内外の出来事を描くことで検閲を逃れながら風刺紙の出版を続けた。そして、1838年11月に臨時『ラ・カリカチュール』が風俗風刺画を掲載しながら試験的に発行され、1839年7月7日号から第二期『ラ・カリカチュール』として完全に復活した。

臨時及び第二期で扱われるテーマは、政治的な主題を避けたため社会風俗、芸術文化の多岐にわたり、後半からは注意深く王室や政治家の個人攻撃を避けながら外交・時事問題も扱うようになる。風俗の多くはパリの路上で観察されるもので、先行して出版された幾つかの『タブロー・ド・パリ』と共通するが、単に写生でなく風刺が込められており、当時の人々の受け取り方の一面がわかる。たとえば、モディスト、公証人、寝とられ亭主、散策者など人々を職業別・傾向別に分類する方法は、他社の『フランス人の自画像』（キュルメール社、1840-1842）、『パリの悪魔』（エッツエル社、1845-1846）に受け継がれている。『ラ・カリカチュール』の発行元オベール社では1841年から1842年にかけて30冊以上が出された『生理学』ものがある。何よりバルザックの『19世紀風俗研究—パリ生活情景』などに共通精神があり、バルザック自身寄稿や編集助言などで深くかかわっている。

このように第二期の号にはバルザックの『人間喜劇』を彷彿とさせるような傑作がいくつも掲載されているが、『ラ・カリカチュール』の意図は一流作家の文章に別刷りの美しい石版画を添えるというもので、多くは彩色され、そのすべてが手彩色である。一方他紙は安いモノクロの木版画で対抗するようになった。さらに、政治風刺の棘を抜かれた『ラ・カリカチュール』は広告を資金源とする廉売競争にも敗北し、1843年には『シャリバリ』に吸収合併され廃刊となった。

第一期『ラ・カリカチュール』は日本国内数箇所には原本があり、復刻本も存在するが、第二期『ラ・カリカチュール』の復刻本はなく、原本所蔵も少ないため、本館の原本は大変貴重である。

## ■ 展示期間、および展示作品リスト

### 第1回 11月12日（月）～11月24日（土）

1. ド・バレー画『フィガロの結婚』（第二幕）（Le mariage de Figaro）」、第3号（1838年11月18日）、リトグラフ版画、モノクロ。

政治的要素を排した臨時『ラ・カリカチュール』は、まず最も人気の高い娯楽であった舞台芸術を主題に選んだ。この口絵は、モーツアルトの歌劇ではなく、ボーマルシェの原作である。場面は第二幕で、アルマヴィーヴァ伯爵夫人がフィガロの婚約者である女中シュザンヌに横恋慕する夫の伯爵を懲らしめるため、小姓のケルビーノを女装させて夫に言い寄せようとする。女優が演ずる少年を女装させるという二重の倒錯の面白さである。設定では3人の合計年齢が52歳のはずであるが、最も若いケルビーノ役のアナイス嬢は当時36歳、実年齢は2.5倍以上という違和感のある配役を揶揄している。

2. グランヴィル画「アカデミーの鐘楼への大競争（連作第2図）（Grande course au clocher académique）」、第2シリーズ第1年第61号（1839年12月29日）、リトグラフ版画、手彩色。

中産階級増加で読者層が拡大し、文学は富と名声を得る手段になった。古典派に比べ、ロマン派は連載小説や軽演劇も手がけ読者の需要に応えたが、古典派の牙城アカデミー・フランセーズにはなかなか選出されなかった。これは、『ノートル・ダム・ド・パリ』（1831）の帽子を頂いたユゴー率いるロマン派作家たちがアカデミーの閉ざされた門を攻撃している場面。先頭は悲劇しか扱わないヴィニー、アレクサンドル・デュマは折れた名剣トレドを持ち、中世風の服装で門に背を向けている。右は「三十女」（同名小説のヒロイン）の髪でブランコをするバルザック。ユゴーは1841年に遂に選出された。

### 第2回 11月26日（月）～12月8日（土）

3. P. ガヴァルニ画「舞台脇の栈敷（La loge d'avant-scène）」、第2シリーズ第2年第11号（1840年3月15日）、リトグラフ版画、モノクロ。

これは、『カーニヴァルの思い出』に収められているリトグラフ（石版画）と同じ作品のモノクロ版。リトグラフとは水と油の反発作用を利用した一種の版画である。したがって、版が残されていれば、このように同じ作品を複製することが可能である。左下方のサインと制作年が鏡文字となって刷られているのは、直接、石版に描画したためであろう。この場面では、オペラ座の仮装舞踏会で17世紀の小姓に扮した女性を舞台上の横手に設けられた特等席の紳士たちが夜食に誘っている。彼らはアンダルシアの牧童に扮しており、当時のスペイン趣味をうかがわせる。

4. P. ガヴァルニ画「舞台脇の栈敷（La loge d'avant-scène）」、『カーニヴァルの思い出』より第5図、リトグラフ版画、手彩色。

風刺作家ガヴァルニ Paul Gavarni (1804-1866) が最も華々しく活躍した時代の代表的なリト

グラフ。良質紙に印刷し手彩色したもの。ドーミエと異なり政治的主張が前面に出ておらず、恋愛や社交行事などを通じ上流の美しい男女を描くのが特徴である。衣裳は現実にあるものよりも進んだアイデアで、画を見た人々が真似をしたと言われ、史上初の著名デザイナーとなった。また題辞はすべてガヴァルニ自身により、文学的才能のあった彼独特の表現である。この彩色版では、水彩絵具の上にアラビアゴムが塗られ一見油絵のような光沢が施されている。

### 第3回 12月10日(月)～12月21日(金)

5. H. ドーミエ画「スカーフの地図 (Les foulards géographiques)」、第3シリーズ第3号 (1842年12月16日)、リトグラフ版画、手彩色。

サインはないが絵の特徴からドーミエと思われる。父親が息子にフランス地図を印刷したスカーフを買い与えようとして、「これで地理を覚えなさい。先ずノルマンディー海岸で涙をかむこと。英仏海峡でかんだら叩くぞ」と言っている。指はずっと南のオーヴェルニュ地方を指している。革命以来身分制度が緩和され、階層交代の激しい学歴社会となり、教育が過熱している様子を風刺。ちなみに、当時、紙はボロ布を回収して作られ高価で、鼻紙というものはなかった。

6. J. プラティエ画「仕事着を着てパリの秘密を探る著名作家 (Un littérateur distingué en costume de travail, à la recherche des mystères de Paris)」、第3シリーズ第47号 (1842年11月20日)、リトグラフ版画、手彩色。

ウージェーヌ・シュー Eugène Sue (1804-1857) の『パリの秘密』(1842-1843) は、それまで文学作品に登場しなかったスラム街を舞台に、そこに生きる貧民たちを描き、識字階級だけでなく読み聞かせてもらった庶民からも支持を受けた。はじめ新聞連載小説として好評を博し、10巻の単行本は19世紀前半で最大のベストセラー小説となった。上流ブルジョワ出身の作家がどこから情報を得ていたかが話題となり、ボロ布を集める屑屋に扮して街を取材して歩いたという都市伝説の漫画化である。シュー自身は当初この企画に「汚くて臭い連中は嫌いだ」と言って拒否したと言われる。

解説指導：伊藤幸次 獨協大学名誉教授

#### 【展示資料】

1. « *La caricature : provisoire* », Paris, Chez Aubert, 1838-1843. 請求番号：未定 (貴重書候補)
2. Paul GAVARNI, *Recueil de 13 suites lithographiques*, [Paris], Chez Bauger : Aubert (printing), [1838-1847]. 請求番号：KB-101

#### 【参考文献】

1. ジュディス・ウェクスラー著、高山宏訳『人間喜劇：十九世紀パリの観相術とカリカチュア』、東京、ありな書房、1987. 請求番号：726.1-W52
2. 石子順著『カリカチュアの近代：7人のヨーロッパ風刺画家』、東京、柏書房、1993. 請求番号：726.1-I763c
3. 高橋憲夫、石塚正英編『風刺図像(カリカチュア)のヨーロッパ史：フックス版』、東京、柏書房、1994.7. 請求番号：726.1-F51
4. 町田市立国際版画美術館編集『ラ・カリカチュール：王に挑んだ新聞』、町田、町田市立国際版画美術館、2003.4. 請求番号：726.1-L12